



がん政策サミット 2010秋

～地域の条例と予算を動かす～

2010年11月6日(土)、7日(日)、8日(月)

11月6日から8日の3日間、「がん政策サミット2010秋～地域の条例と予算を動かす～」(主催: 日本医療政策機構 市民医療協議会 がん政策情報センター)が開催され、国と都道府県のがん対策推進協議会等の患者関係委員、公募による選考を経た全国の患者アドボケート39人(29県)、県議会議員32人(20県)、国会議員16人(秘書19人)、県庁職員17人(11県)が一堂に会しました。

この2日半で、同じ地域から患者アドボケート、県議会議員、県庁職員が参加し、学んだことを持ち帰り、一緒に取り組んでいくための一歩となりました。

1日目／11月6日(土)

がん条例の制定、そして運用に向けて

◆愛媛県: 岡田志朗さん(県会議員)と玉井敏久さん(県会議員)は、“がんになっても安心して暮らしていける愛媛”と“県民総ぐるみ”をキーワードに、2010年3月に全会一致で愛媛県がん対策推進条例が可決されたことを話しました。また岡田さんは、愛媛県のがん条例には条項として、患者・家族の経験を生かし継続的にがん対策の施策を進捗管理することが盛り込まれていると説明しました。

◆島根県: 佐々木雄三さん(県会議員、がん推進議員連盟会長)は、故・佐藤均さんの一言がきっかけとなり県議会ではがん対策の討議を開始、全国に先駆けて2006年9月にはがん条例が制定されたと語りました。さらに、07年から住民からがん対策の資金を募る“バナナ募金”が始まり、機器の購入だけでなく専門医の研修や県下25カ所のがんサロンのイベント支援等に使われている、とも述べました。

◆高知県: 小椋和之さん(高知県がん対策推進協議会患者関係委員、県庁職員)は、条例制定には熱意に加え戦略やノウハウが必要と熱く語りました。山本広明さん(県会議員)は、2人のがん患者アドボケートの願いを受け、2005年のがん関連の請願書を全会一致で可決し、機運が高まり2007年3月に高知県がん対策推進条例が可決したと説明しました。



◆奈良県: 吉岡敏子さん(奈良県がん対策推進協議会委員)は、がん対策の遅れを指摘した論文が起爆剤となり、有力議員に議員提案を強力に要請したことが、条例制定に至ったと振り返りました。今井光子さん(県会議員)は、議員提案の条例は画期的で、会派代表が集まり、患者関係者、医療提供者の意見を集め、先進事例を参考にして議論を深めたと、当時の様子を説明しました。

◆沖縄県: 吉田祐子さん(沖縄県がん対策推進協議会委員)は、医療提供者がリードしていたがん対策を、患者関係者に説明し、患者視線を導入したがん条例制定に向けて活動中と報告がありました。前島明男さん(県会議員)は、議員提案による条例制定に向けて意気込みを語りました。

◆徳島県: 勢井啓介さん(徳島県健康対策審議会委員)は、行政がひながたを作ったがん対策推進条例案・アクションプランに対する意見を患者関係者が参加するメーリングリストで交換したことが、条例に患者の声を反映する契機となったと話しました。吉坂保紀さん(県会議員)は、会派の中で条例の必要性が理解され制定にこぎつけたが、今後は患者団体と連携して活動を行いたいと力説しました。

◆岐阜県: 橋渡智美さん(岐阜県がん対策推進協議会委員)は、がん患者関係者・県議会・県庁の三位一体で協力し、条例を絵に描いた餅にしないようにしたいと語りました。岩花正樹さん(県会議員)は、岐阜県はがん死亡率が高いため、がん対策推進計画を具体的に推進するために条例化を行った、と説明しました。

「サミットの縁を地元のがん対策につなげよう」

日本医療政策機構 がん政策情報センター センター長 埴岡健一

がん政策サミットでは、参加者の輪を徐々に広げていくこと目指しています。これまで、患者関係者、行政といった、様々な立場の方にご参加をいただきましたが、とりわけ今回は多くの都道府県議会議員をお招きすることができました。このサミットが皆さんにとって有意義な会になることを願っております。



都道府県がん予算を知る



◆山崎晋一朗さん(千葉県健康づくり支援課長)は、増えているのは予防・早期発見、検診関係の予算で、概算要求額の7割が占められている一方で、がん診療連携拠点病院の予算は、少しずつ減ってきている、と説明しました。

◆小豆澤伸司さん(島根県健康福祉部医療政策課)は、県のがん対策予算には、通常、国庫補助金や県の一般財源を使うが、島根県ではそれ以外の財源を活用して拡充を図ったとして「ふるさと島根基金」の紹介をしました。



◆安岡佑莉子さん(高知県がん対策推進委員)は、「皆さん、条例で何をしたいのか目的を持ってますか」と問いかけ、相談センター設立を目指して条例を制定を働きかけた経験を語りました。



国会議員からのメッセージ



古川元久さん
(衆議院議員 内閣官房副長官)

「皆さんがそれぞれの地域でリーダーシップを取って、各地のがん対策の質を上げることが非常に大事です。地域でよいものは、国のレベルでもやっていきたいと思っておりますので、ぜひお教えください。第二期がん対策推進基本計画策定に向けてもう一度、世論を盛り上げていただきたい」

菅原一秀さん

(衆議院議員 厚生労働委員会委員)

「がん対策は国と地方が一体になってやらなければいけません。第二期がん対策推進基本計画が施行になるわけですが、予算確保のためにも超党派の議連で前向きに進めていくことが大事だと思います」



渡辺孝男さん

(参議院議員 元・厚生労働副大臣)

「ハコモノなどは財源を確保すれば進みますが、啓発は予算を取るだけではなかなか進みません。医療機関、行政が気づかない点も多くあります。皆さんが行政の方にご意見を伝えていただくことが大事です」



たばこ対策特別セッション

◆神奈川県知事の松沢成文さんは、「まずは熱心な団体とスクラムを組み、反対団体とも話し合い妥協点を探る」と力強く語りました。「県議会で徹夜で議論をした結果、罰則だけは譲れない、その代わりに、猶予期間を設けるといいう、ギリギリの交渉をしました。もし、反対派が提示した 2つの条件を認めれば正に骨抜きとなります。早い段階で考えが異なる人を巻き込んでおくことが大切です。関係団体の皆さんは、知事と一緒に話し合っって作った条例だから、反対はしたけど守ろうと理解を示してくれています」。



◆望月友美子さん(国立がん研究センター研究所)は、「がん予防検定～たばこ編～」と題してクイズ形式で世界や日本のたばこ対策の状況を解説しました。この検定は、北見NPOサポートセンターが当機構と協働で実施している方法を用いたもので、参加者が「検定」にチャレンジしました。



がん対策の中枢を訪ねる

国会議員との意見交換会

◆議員会館で行われた意見交換会に参加した議員からは「皆さんと一緒にぜひ頑張りたい」といった声が多く聞かれました。一方で、提言の際には「具体的に、どういう問題があるから、こういうふう動いてほしいと示してくれると国会議員として動きやすくなる」といった指摘も。尾辻秀久さん(参議院議員 元厚生労働大臣)は、国のがん対策推進協議会の運営見直しを議員に訴える患者関係委員の発言に対し、次回協議会の傍聴を約束。「国会がん患者と家族の会」は開店休業状態でしたが、世話人である仙谷由人さんとも、問題を整理しようということになりました。行政と皆さんとの溝が深まってよいことはない。私どもが溝を埋めながらお互いによりよいものにしていかなければいけない」と、超党派がん議連である「国会がん患者と家族の会」の活動再開を宣言しました。



国立がん研究センター訪問

◆国立がん研究センター理事長である嘉山孝正さんは、「患者さんと一緒にがん医療を変えたい思いで、都道府県がん診療連携拠点病院連絡協議会の下に『臨床試験部会』を作りました。これは、ドラッグ・ラグの解消をめざすものです。また、情報共有として1～3カ月に1回、患者団体の方にも参加していただいて、記者会見を行っています」と、患者関係者との協力体制について説明しました。



※肩書きは開催当時のものです。がん政策サミットのレポートは <http://ganseisaku.net/> に掲載中。